『言語学大辞典』第1巻【世界言語編】(上)

ウラル語族 英 Uralic (Uralian) languages, 独 uralische Sprachen, 仏 langues ouraliennes, 露 уральские языки.

スカンジナビア(フィンランド，スウェーデン，ノルウェー)，中部ヨーロッパ(ハンガリー，ルーマニア，チェコスロバキア，ユーゴスラビア等)，ソビエト連邦(ヨーロッパ部，西シベリア)などで話されている諸言語で，語族全体の話者は，約2,300万人と推定される(図1).

ウラル語族は，大きくフィン・ウゴル語派とサモエード語派とに2分され，前者は，さらにいくつかのグループに下位区分される．ウラル語族に属する言語の名称，話者の数，話されている主な地域は次のとおりである．話者の数は，フィンランド語，エストニア語，サーミ(諸)語，ハンガリー語を除き，すべて1979年のソ連の国勢調査(母語または第2言語として自由に話す話者の数；？は，統計の対象とされなかったことを示す)にもとづくものである．

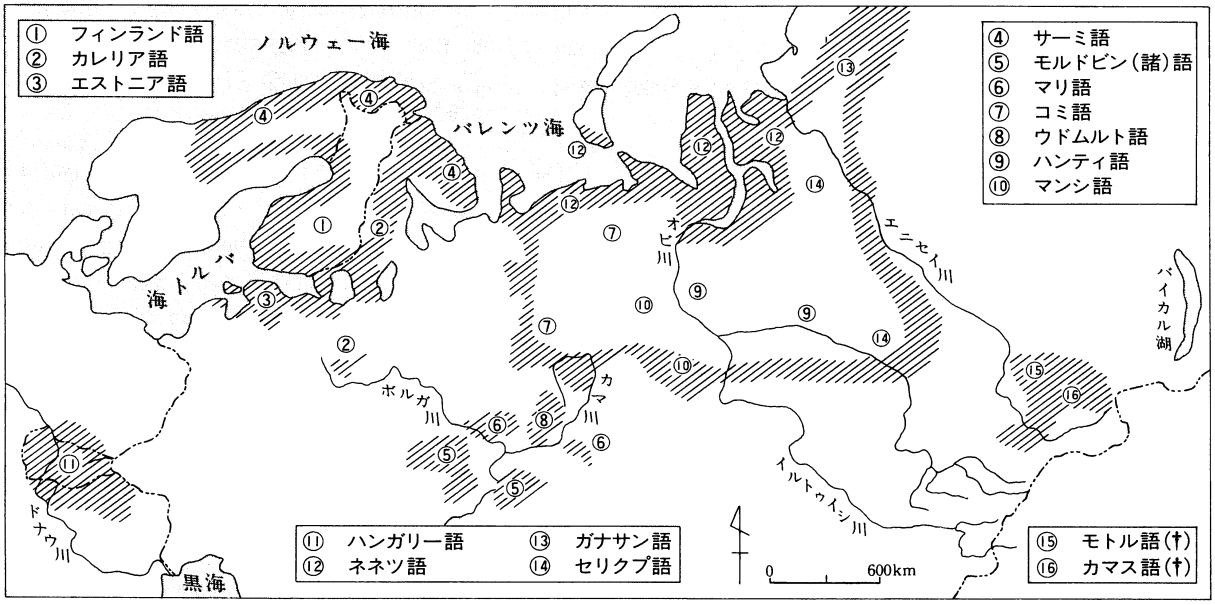
A) フィン・ウゴル語派 (Finno-Ugric)

a) バルト・フィン諸語 (Baltic-Finnic)

1) フィンランド語(Finnish；約500万人；フィンランド，スウェーデン)

2) カレリア語 (Karelian；9万4千人；ソ連

〈図1〉 ウラル諸語の地理的分布



〔カレリア自治共和国〕)

3) ベプス語 (Veps; 4千人; ソ連〔カレリア自治共和国, レニングラード州〕)

4) イジョール語 (Izhorian; 360人; ソ連〔レニングラード州〕)

5) ボート語 (Vote; ?; ソ連〔レニングラード州〕)

6) エストニア語 (Estonian; 約100万人; ソ連〔エストニア共和国〕)

7) リーブ語 (Livonian; ?; ソ連〔ラトビア共和国〕)

b) サーミ(諸)語〔ラップ語〕(Saami〔Lapp〕; 2万人; フィンランド, ノルウェー, スウェーデン, ソ連〔ムルマンスク州〕)

c) ボルガ諸語 (Volgaic)

1) モルドビン(諸)語〔エルジャ語, モクシャ語〕(Mordvin〔Erzya, Moksha〕; 95万2千人; ソ連〔モルドバ自治共和国, ゴーリキー州, ペンザ州, ウリヤノフスク州, クイビシェフ州, タタール自治共和国, オーレンブルク州〕)

2) マリ語 (Mari; 55万6千人; ソ連〔マリ自治共和国, バシキール自治共和国, キーロフ州, タタール自治共和国〕)

d) ペルム諸語 (Permic)

1) コミ語〔コミ・ジリエーン語 (Komi〔Komi-Zyryan〕; 26万7千人; ソ連〔コミ自治共和国〕)

2) コミ・ペルミャク語 (Komi-Permyak; 12万5千人; ソ連〔コミ・ペルミャク自治管区, ペルム州〕)

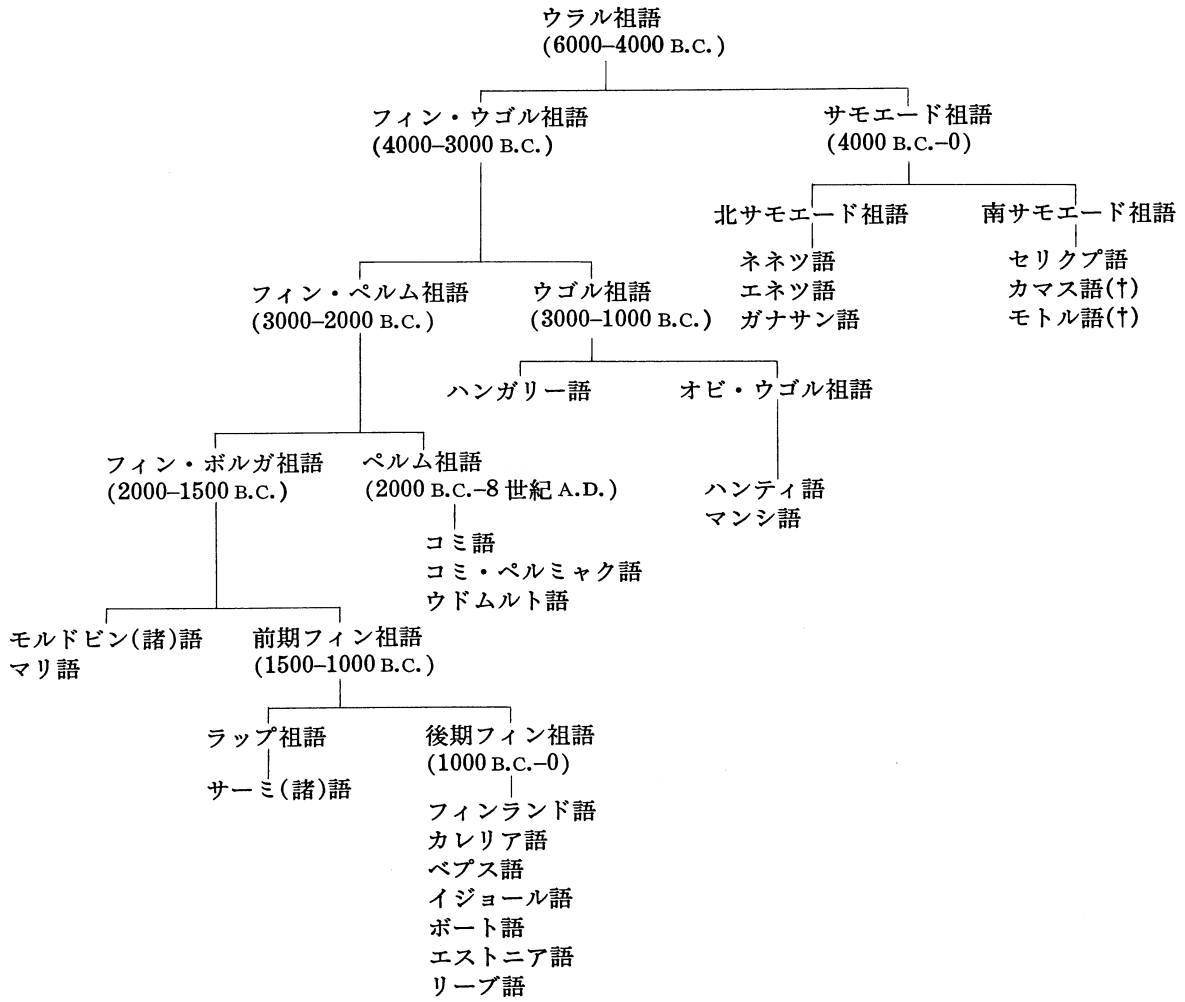
3) ウドムルト語 (Udmurt; 58万人; ソ連〔ウドムルト自治共和国, ペルム州, タタール自治共和国, キーロフ州〕)

e) ウゴル諸語 (Ugric)

1) オビ・ウゴル諸語 (Ob-Ugric)

i) ハンティ語 (Khanty; 1万5千人; ソ連〔ハンティ・マンシ自治管区, ヤマロ・ネネツ自治管区〕)

〈図 2〉 ウラル諸語の系統的関係



ii）マンシ語（Mansi；4千人；ソ連〔ハンティ・マンシ自治管区〕）

2）ハンガリー語（Hungarian；約1,500万人；ハンガリー，ルーマニア，ユーゴスラビア，チェコスロバキア，ソ連〔ウクライナ〕，オーストリア）

B）サモエード(サモイェード)語派（Samoyedic）

1）ネネツ語（Nenets；2万4千人；ソ連〔ネネツ民族管区，ヤマロ・ネネツ自治管区，タイミル民族管区〕）

2）エネツ語（Enets；?；ソ連〔タイミル民族管区〕）

3）ガナサン語（Nganasan；800人；ソ連〔タイミル民族管区〕）

4）セリクプ語（Selkup；2千人；ソ連〔ヤマロ・ネネツ民族管区，トムスク州，クラスノヤルスク州〕）

サモエード語派に属する言語には，このほかに，エニセイ（Енисей）川上流のサヤン（Саян）地方のカマス語（Kamas；最後の話者が1980年ごろまで生存していたという報告がある）とモトル語（Motor；19世紀初期に死滅）がある．また，ボルガ川とその支流のオカ（Ока）川に囲まれた地域に，少なくとも10世紀ごろまではメリヤ人（Merya）とムロマ人（Murom）とよばれる民族が住んでいたことが，年代記などによって知られており，彼らは，フィン・ウゴル系の言語（メリヤ語，ムロマ語）を話していたものと推定される（図2）．

ウラル諸語の中で比較的古くからまとまったテキストをもっているのは，ハンガリー語（*Halotti Beszéd*『弔辞』，13世紀初頭），エストニア語（*Kullamaa vakuraamat*『クラマーの祈禱書』，1520年代初め），フィンランド語（M. Agricola, *Abckirja*『ABCの本』，1543年ころ）だけである．そのほかの言語は，ロシア革命以前から，ある程度，文語が用いられていたモルドビン語（エルジャ語，モクシャ語），マリ語，ウドムルト語，コミ語を除くと，おおむね今世紀に入ってから文語が考案された．なお，ボート語，エネツ語，ガナサン語には，文語が存在したことがない．

フィンランド語とハンガリー語が親縁関係にあるという考え方は，すでに17世紀ごろ芽生えており，今日の「ウラル語族」にほぼ相当する概念は，18世紀の末ごろにはすでに成立していた．本格的な比較言語学的研究がウラル語族の諸言語を対象として行なわれるのは，フィンランドのカストレーン（M. A. Castrén, 1813–52）や，ハンガリーのレグリ（A. Reguly, 1819–58）を草分けとして，フィンランドやハンガリーの学者たちが，ロシアや西シベリアで話されているウラル

〈表1〉 ウラル祖語にまでさかのぼる語彙

Uralic	Finnish	Saami	Mari	Udmurt	Hungarian	Nenets
*ke	ken, ke-「誰」	gī	kö	кин	ki	ся-н「いくつ」
*ku	ku-ka「誰」	gu-tti「どの」	ку-до「どの」	ку-д「どの」	ho-l「どこ」	ху-на「どこ」
*śilmä	silmä「目」	čâlˈbme	шинча	син	szem	сэв
*sōne	suoni「血管，静脈」	suodnâ「腱」	шöн「腱」	сöн「腱」	ín「腱」	тэ'「腱」
*śuwe	suu「口」	čoddâ	имы-шу	—	száj	сё「食道」
*maksa	maksa「肝臓」	muokse(dial.)	мокш	мус	máj	мыд
*süðäm-	sydän「心臓」	čâđâ「～を通って」	шÿм「心臓」	сюлэм「心臓」	szív「心臓」	сей「心臓」
*nime	nimi「名前」	nâmmâ	лÿм	ним	név	нюм'
*wete	vesi「水」	—	вÿд	ву	víz	и"
*puwe	puu「木」	—	пу	пу	fa	пя
*pesä	pesä「巣」	bæsse「巣」	пыжаш「巣」	пуз「卵」	fészek「巣」	пидя「巣」
*kala	kala「魚」	guolle	кол	—	hal	халя
*waśka	vaski「銅」	væiˈke「銅」	—	уз-весь「鉛」	vas「鉄」	еся「鉄」
*elä-	elä-「生きる，生活する」	ælle-	иле-	ул-	él	иле-
*tumte-	tunte-「知っている」	dowˈdâ-	—	тод-	tud	тумда-
*mene-	mene-「行く」	mânnâ-	мие-	мын-	men-	мин-
*kūle-	kuule-「聞く」	gullâ-「聞く」	кола-「聞く」	кыл-「聞く」	hall「聞く」	ха「耳」
*luke-	luke-「読む，数える」	lokkâ-	луда-	лыдзы-	olvas	лахана-「話す」

諸語の現地調査をはじめる1840年ごろ以降のことである．この現地調査は，第1次世界大戦のころまで盛んに続けられるが，このようにして集積された資料の占める比重が大きいことは，文献資料が乏しいウラル比較言語学の特色となっている．ウラル言語学に，青年文法学派の方法論による比較研究を導入したのは，フィンランドではセタラ (E. N. Setälä, 1864–1935)，ハンガリーではシンニェイ (J. Szinnyei, 1857–1943) で，彼らによって，今日のウラル比較言語学が確立した．とくに，シンニェイが1910年に著わした『フィン・ウゴル言語学』(*Finnisch-ugrische Sprachwissenschaft*) は，フィン・ウゴル比較言語学を包括的に提示したものとしては最初のものである．

第1次世界大戦以後の最大の特徴は，ウラル言語学

〈表 2〉 フィン・ウゴル祖語にまでさかのぼる語彙

Finn-Ugric	Finnish	Saami	Mari	Udmurt	Hungarian
*säppä	sappi「胆汁，胆のう」	sapˈpe	—	сэп	epe
*were	veri「血」	vârrâ	вӹр	вир	vér
*jalka	jalka「足」	juolˈge「足」	йол「足」	—	gyalog「徒歩で」
*käte	käsi「手」	giettâ	кид	ки	kéz
*śorwa	sarvi「角(つの)」	čoarˈve	шур	сюр	szarv
*tälwä	talvi「冬」	dalˈve	теле	тол	tél
*jäŋe	jää「氷」	jiegŋâ	ий	йö	jég
*sükśe	syksy「秋」	čâkˈčâ	шыже	сӥзьыл	ősz
*tüŋe	tyvi「根もと」	—	тӹнг	дӥнь	tő
*täje	täi「シラミ」	dikˈke	тий	тэй	tetű
*lunta	lintu「鳥」	lodˈde「鳥」	лудо「アヒル，カモ」	—	lúd「ガチョウ」
*kiwe	kivi「石」	—	кӹ「石」	кö「ひき臼石」	kő「石」
*wole-	ole-「いる，ある」	—	ула-「いる，ある」	выд-эм，вал「いた，あった」	vol-, val-「いる，ある」
*lē-	lie-「いる，ある」	læ-	лия-	лу-	le-sz
*amta-	anta-「与える」	vuowˈde-「売る」	—	уд-「飲ませる」	ad「与える」
*juγe-	juo-「飲む」	jukkâ-	йӹа-	ю-	i-szik
*wuδˈe	uusi「新しい」	ođđâ	у	выль	új
*woje	voi「バター」	vuoggjâ	ӹй	вöй	vaj
*lēme	liemi「スープ」	liebmâ	лем	лым	lé
*kolme	kolme「3」	golˈbmâ	кум	куинь	három
*witte	viisi「5」	vitˈtâ	вич	вить	öt
*śata	sata「100」	čuotte	шӹдö	сю	száz

〈表 3〉 ウラル諸語の数詞

	Finnish	Estonian	Saami	Erzya	Mari	Udmurt	Komi	Mansi	Hungarian	Nenets
1	yksi	üks	okˈtâ	вейке	ки	одйг	öтик	аква	egy	ӈоб”
2	kaksi	kaks	guokˈtĕ	кавто	кок	кык	кык	китыг	két	сидя
3	kolme	kolm	golˈbmâ	колмо	кум	куинь	куим	хӯрум	három	няхар”
4	neljä	neli	njælˈljĕ	ниле	ныл	ньыль	нёль	нила	négy	тет
5	viisi	viis	vitˈtâ	вете	вич	вить	вит	ат	öt	самляӈг
6	kuusi	kuus	gutˈtâ	кото	куд	куать	квайт	хōт	hat	мат”
7	seitsemän	seitse	čieǯâ	сисем	шым	сизьым	сизим	сāт	hét	си”йв
8	kahdeksan	kaheksa	gavce	кавксо	кандаш	тямыс	кökъямыс	нёлолов	nyolc	синдет
9	yhdeksän	üheksa	ovce	вейксэ	индеш	укмыс	öкмыс	онтолов	kilenc	хасую”
10	kymmenen	kümme	loǥe	кемень	лу	дас	дас	лов	tíz	ю”
100	sata	sada	čuotte	сядо	шӹдö	сю	сё	сāт	száz	юр”
1000	tuhat	tuhat	duhat	тыща	тӹжем	сюрс	сюрс	сōтыр	ezer	ёнар”

におけるフィンランドとハンガリーの学者の相対的比重が小さくなり，ソ連国内のウラル諸語のネイティブ・スピーカーによる研究が盛んになったことである．ウラル比較言語学の集大成として，1950年代後半に出されたコリンデル (Bj. Collinder, 1894–1983) の『ウラル諸語ハンドブック』(*A Handbook of the Uralic Languages*) とよばれる3部作 (*Fenno-Ugric Vocabulary*, 1955; *Survey of the Uralic Languages*, 1957; *Comparative Grammar of the Uralic Languages*, 1960) は，この点，比較的保守的であるが，1970年代にソ連とハンガリーのウラル言語学者の共同で出版された『フィン・ウゴル言語学の基礎』(*Основы финно-угорского языкознания*) とよばれる3部作には，ソビエト体制になってからのソ連のフィン・ウゴル諸語の研究の進歩と広がりがよくあらわれている．

ウラル語族の諸言語は，ウラル祖語 (Proto-Uralic, uralische Grundsprache, уральский язык-основа) とよばれる言語形態にさかのぼると，考えられている．ウラル祖語の時代は，紀元前6千年頃から，フィン・ウゴル語派の祖先であるフィン・ウゴル祖語 (Proto-Finno-Ugric, finnisch-ugrische Grundsprache, финно-угорский язык-основа) とサモエード語派の祖先であるサモエード祖語 (Proto-Samoyed, samojedische Grundsprache, самодийский язык-основа) とが分かれた紀元前4千年頃まで続いたと推定される(表1～3参照)．

ウラル祖語が話されていた地域，いわゆるウラル語族の「故地 (Urheimat, прародина)」に関しては，表4の5種の樹木(いずれもその名称が，ウラル祖語ないしフィン・ウゴル祖語の語彙として再建される）のウラル祖語時代の分布にもとづいて，その中心が，ウラル山脈の北部地方（ペチョラ Печора 川の水源付近より北）からオビ川の中下流地方にかけての地域にあったとする説（ハイドゥー P. Hajdú）が比較的有力である．

〈表 4〉 ウラル語族の故地の決め手となる樹木

1) Picea : PU *kowese (spruce; Fichte; ель)
マツ科ハリモミ属の木〔トウヒ，エゾマツの類〕(フィンランド語 kuusi)
2) Pinus sibirica : PU *si̯kse (stonepine, cembra pine; Zirbelkiefer; сибирский кедр)
マツ科マツ属の木〔マツの一種〕(コミ語 сус-пу)
3) Abies : PU *ńulka (fir; Tanne; пихта)
マツ科モミ属の木〔モミ〕(マリ語 нулго)
4) Larix : PFU *ńäŋe (larch Lärche; лиственница)
マツ科カラマツ属の木〔カラマツ〕(コミ語 ниа)
5) Ulmus : PFU *śala (elm; Ulme; вяз)
ニレ科ニレ属の木〔ニレ〕(フィンランド語 jalava)

出典：ハイドゥー (P. Hajdú, 1976) による．

フィン・ウゴル諸民族の祖先は，この故地の南東部に位置していたが，さらに南東方向に移動して，サモエード人の祖先と分かれるに至ったと考えられる．

フィン・ウゴル語派の故地に関しては，ウラル山脈の西，カマ (Кама) 川の支流のビャトカ (Вятка) 川からペチョラ川の上流にかけての地域とする説（デーチ Gy. Décsy）や，さらに南東方向のボルガ川中流域とする説(コリンデル)などがある．最近では，故地を狭い地域に特定しようとする考え方に対して，すでにフィン・ウゴル祖語時代の末期になると，フィン・ウゴル諸民族の祖先は，ウラル山脈からバルト海に及ぶ広い地域に広がって住むようになり，居住地域の拡大によって生じた方言差の増大が，やがて祖語を分裂へと導いたとして，言語分化を説明する考え方が有力になりつつある．

ウラル語族と他の語族との関係については，インド・ヨーロッパ語族，アルタイ諸語，ユカギル語 (Yukaghir) との間に，それぞれ同系説が出されている．代名詞や接尾辞をはじめ，少なからぬ語彙に同一起源ではないかと考えられるものがあるというのが，同系説の主たる根拠であるが，決定的な決め手はない．

他方，インド・ヨーロッパ語族とウラル語族の接触はかなり古いことが，借用語の研究から知られている．ウラル諸語の語彙で，借用語であることがはっきりしているもののうち，もっとも古い層をなすのが，フィン・ウゴル祖語時代に，インド・ヨーロッパ祖語（ないしはインド・イラン祖語）から借用されたとされる「100」(フィンランド語 sata)，「つの」(sarvi)，「孤児」(orpo)，「ミツバチ」(mehiläinen)，「みつ」(mesi) などの語である．これらの語は，対応する語形がサモエード語派にはみられない．

ウラル諸民族は，形質人類学的にみると，地理的に東に位置する民族ほど，モンゴロイド (Mongoloid) 的特徴が強いといってよい(図3参照)．もっとも東に位置するオビ川流域のハンティ人，マンシ人は，モンゴロイドとユーロポイド (Europeoid; あるいはコーカソイド Caucasoid) の中間形態とされるウラル人種 (Uralic) に属し，モンゴロイド的特徴が顕著である．ボルガ・カマ地域のマリ人，ウドムルト人，コミ・ペルミャク人，モルドビン人の一部（主としてモクシャ人），コミ人の一部（南東部）は，ウラル人種とされるが，ハンティ人，マンシ人よりユーロポイド的特徴が強い．これに対し，フィンランド人やエストニア人を

はじめとするバルト・フィン諸民族，ハンガリー人，コミ人の大部分，モルドビン人の一部（主としてエルジャ人）は，ユーロポイドである．中でも，フィンランドの西部やエストニアの西北部では，スカンジナビアに特徴的なノルディック人種（Nordic）が一般的である．ただし，スカンジナビア半島の北部に位置するサーミ人(ラップ人)は，モンゴロイド的特徴が比較的顕著で，ラップ人種（Lapponoid；ウラル人種の1種とされる）とよばれる．また，サモエード人は，一般にウラル人種に分類される．

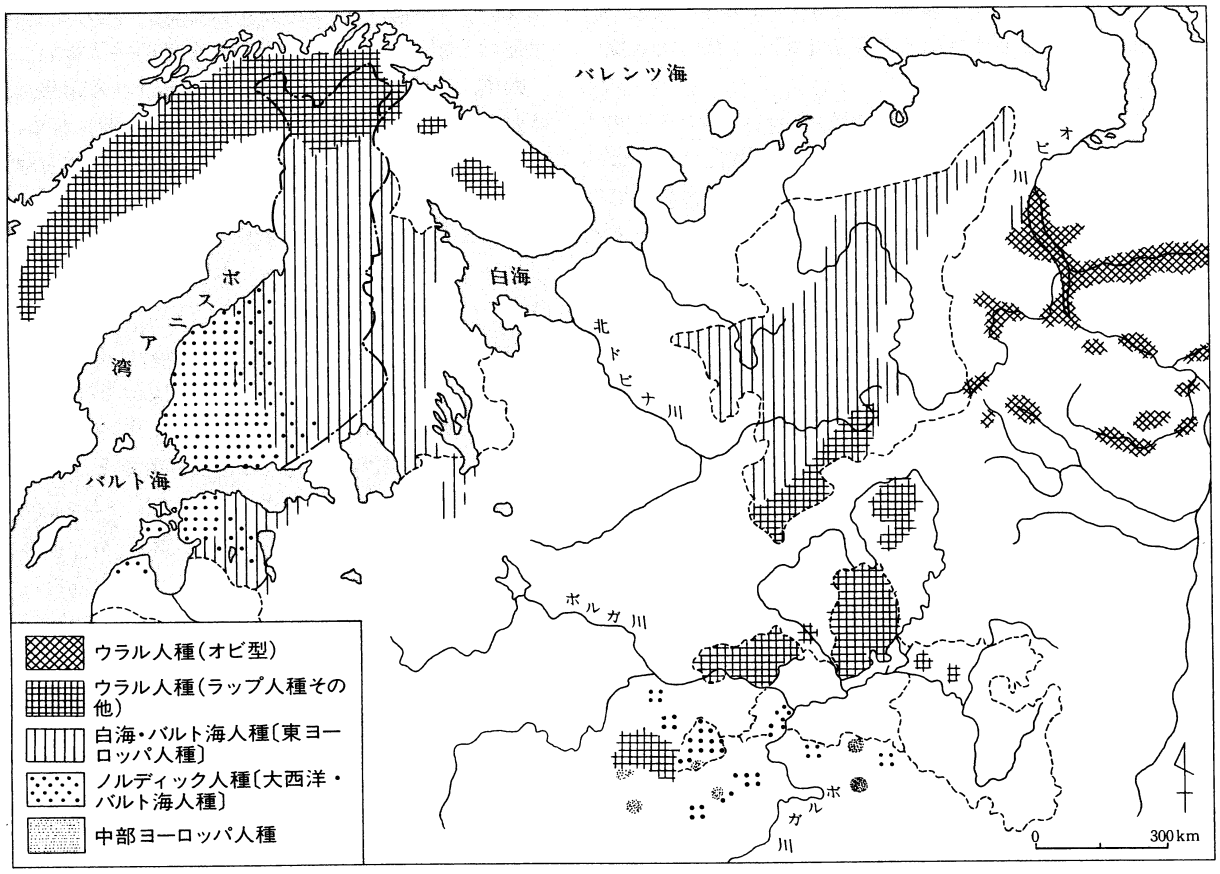
ウラル祖語は，統語類型論的には，動詞が文末におかれる（verb-final），いわゆる SOV 型の言語であったと考えられており，現在のウラル諸語でも，この型の言語の典型的な特徴とされている現象がひろく観察される．現在のウラル諸語の基本語順を地理的に眺めると，おおむね SOV 語順は東の諸言語，SVO 語順は西の諸言語の特徴と見なすことができる．すなわち，オビ・ウゴル諸語(ハンティ語，マンシ語)やサモエード諸語は，一般に典型的な動詞文末型の言語である．ペルム諸語とボルガ諸語には，東西の特徴がみられ，ウドムルト語とマリ語は動詞文末型であるが，モルドビン諸語とコミ語，コミ・ペルミャク語は SVO 型となっている．サーミ語とバルト・フィン諸語(フィンランド語，エストニア語など)は一般に SVO 型である．ハンガリー語は，基本語順を OV とも VO とも決めがたいが，明らかに動詞文末型の言語とみることは無理で，SVO 化の傾向がかなり強いとみてさしつかえない(表5)．

形容詞，名詞，数詞等の名詞修飾語は，一般に被修飾名詞に先行するのが，ウラル諸語の特徴である(表6)が，SVO 型の言語では，名詞に対して後置される修飾句も広くみられる(表7)．

ウラル諸語は一般に後置詞言語であるが，バルト・フィン諸語では前置詞も多くみられる(表8)．

母音調和は，ウラル祖語の時代から存在した現象と考えられている．現在では，バルト・フィン諸語，ボルガ諸語，ハンガリー語でみられる．ウラル諸語の母音調和は，一般に「前母音—後母音」の対立にもとづく「舌の調和」であるが，ハンガリー語のように，「円唇母音—非円唇母音」の対立にもとづく「唇の調和」を合わせもつ言語もある．また，フィンランド語の /i, e/ のように，母音調和に関与しない母音が存在するのが一般的である．母音調和は，語根の内部だけでなく，接尾辞や前接語（enclitic）を含めた語全体に及ぶのが

〈図3〉 形質人類学的に見たフィン・ウゴル諸民族



出典：マルク（K. Mark，1970）による．

〈表 5〉 ウラル諸語の基本語順

SVO 型

フィンランド語

Poika *lähtee* huoneesta.
少年 去る 部屋から
「少年が部屋から去る」

Mies *tappoi* koiran.
男 殺した 犬を
「男が犬を殺した」

エストニア語

Jüri *elab* Tartus.
ユリ 住む タルトに
「ユリはタルトに住んでいる」

Üliõpilased *ehitavad* ühiselamut.
大学生たち 建てる 寮を
「学生たちは寮を建設している」

エルジャ語

Миша *тонавтни* университетсэ.
ミーシャ 学ぶ 大学で
「ミーシャは大学で学んでいる」

Маша *ловны* книга.
マーシャ 読む 本
「マーシャが本を読んでいる」

SOV 型

マリ語

Йыван Йошкар-Олаште *ила.*
イワン ヨシカルオラに 住む
「イワンはヨシカルオラに住んでいる」

Эчан газетым *лудеш.*
エチャン 新聞を 読む
「エチャンが新聞を読んでいる」

ウドムルト語

Ми ӵуказе совхозэ *мыномы.*
わたしたち あす ソホーズへ 行く
「わたしたちはあすソホーズへ行く」

Дышетйсь доклад *дэсьтоз.*
教師 報告 する
「教師が報告を行なう」

マンシ語

Мань колкве я ватат *унлыс.*
小さい 家 川 岸に すわっていた
「小さな家が川岸にあった」

Маньси хум хул *алисьли.*
マンシの 男 魚 つかまえる
「マンシ人の男が魚をつかまえる」

〈表 6〉 名詞の修飾語

エストニア語

uus maja 「新しい家」
新しい 家

maja katus; kivi-st maja
家の 屋根 石から 家
「家の屋根」 「石の家」

kolm maja 「3 軒の家」
3 家

マリ語

y пӧрт 「新しい家」
新しい 家

колхоз-ын пасу-жо; нӧрт леведыш
コルホーズの 畑-px 家 覆い
「コルホーズの畑」 「家の屋根」

кум пӧрт 「3 軒の家」
3 家

ウドムルト語

выль книга 「新しい本」
新しい 本

совхоз-лэн бусы-ез; корка липет
ソホーズの 畑-px 家 屋根
「ソホーズの畑」 「家の屋根」

куинь нунал 「3 日」
3 日

ハンガリー語

az új ház 「新しい家」
冠詞 新しい 家

a ház ajta-ja; a ház-nak az ajta-ja
冠詞 家 ドア-px 冠詞 家の 冠詞 ドア-px
「家のドア」

három ház 「3 軒の家」
3 家

注：px＝所有接尾辞

〈表 7〉 名詞に後置される修飾句

フィンランド語

kirje ystävä-ltä 「友人からの手紙」
手紙 友人から

エストニア語

mees Tartu-st 「タルト出身の男」
男 タルトから

cf. マリ語：

ош ӱшкыж нерген *йомак*
白い 雄牛 について 説話
「白い雄牛についての説話」

〈表 8〉 後置詞と前置詞

〔後置詞〕

フィンランド語	talo-n	*takana*
	家の	うしろに
	「家のうしろに」	
エストニア語	maja	*taga*
	家	うしろに
マリ語	пӧрт	*шенгелне*
	家	うしろに
ウドムルト語	корка	*сьӧрын*
	家	うしろに

マンシ語	кол	*cucm*	
	家	うしろに	
ハンガリー語	a	ház	*mögött*
	冠詞	家	うしろに

〔前置詞〕

フィンランド語	*ympäri*	vuode-n
	まわりに	年
	「1 年を通して，1 年中」	
エストニア語	*pärast*	lõuna-t
	あとに	昼
	「昼過ぎに」	

〈表 9〉 母音調和の例

«ハンガリー語»

vár-ok ～ kér-ek ～ tör-ök
「私は待つ」 「私は頼む」 「私はこわす」
—— o～e～ö [ø]

vár-unk ～ kér-ünk ～ tör-ünk
「私たちは待つ」 「私たちは頼む」 「私たちはこわす」
—— u～ü [y]

«フィンランド語»

halu-tto-muute-nsa-ko-han
「彼の気のすすまないことかしら?」
—— a [ɑ], o, u

äly-ttö-myyte-nsä-kö-hän
「彼の知性がないことかしら?」
—— ä [a], ö [ø], y [y]

〈表 10〉 ハンガリー語の場所関係を表わす格

内格(inessive)	出格(elative)	入格(illative)
fal-ban	fal-ból	fal-ba
「壁(の内部)に」	「壁(の内部)から」	「壁(の内部)へ」
上格(superessive)	離格(delative)	着格(sublative)
fal-on	fal-ról	fal-ra
「壁(の表面)に」	「壁(の表面)から」	「壁(の表面)へ」
接格(adessive)	奪格(ablative)	向格(allative)
fal-nál	fal-tól	fal-hoz
「壁のところに」	「壁のところから」	「壁のところへ」

もっとも典型的である（表 9）.

名詞の活用のカテゴリーは，数と格で，インド・ヨーロッパ語族やセム語族などにみられるような性 (gender) の区別は一般に存在しない．ウラル祖語では，単数と複数のほかに双数 (dual) が区別されていたと考えられるが，現在では，双数がみられるのは周辺に位置するサーミ諸語，オビ・ウゴル諸語，サモエード諸語に限られる．格の体系としては，主格(語尾なし)，属格(*-n)，対格(*-m)，所格 (*-na/-nä, locative)，奪格(*-ta/*-tä, ablative)，向格 (*-k～ *-n, lative) の 6 つからなる体系が，ウラル祖語，フィン・ウゴル祖語の時代を通じて想定される．格の数は，一部の言語を除いて，一般にこれよりも増えており，学者によってそれぞれの言語の格の認定は必ずしも一致しないが，ハンガリー語で 20 前後，コミ語で 16 ないし 17，ウドムルト語で 15 ないし 16，フィンランド語で 14 ないし 15，エストニア語で 14 などとなっている．格の数を多くしている最大の要因は，場所関係を表わす格が細分化していることである(表 10).

所有接尾辞 (possessive suffix) の存在もウラル諸語を特徴づける現象である．所有接尾辞は，一般に，当該の名詞の指示する対象の所有者(所属先)の人称と数に対応する人称代名詞から発達したものと考えられている．所有接尾辞と格語尾の位置関係では，地理的に東の言語では「語幹＋所有接尾辞＋格語尾」という構造が一般的であるのに対し，西の言語では「語幹＋格語尾＋所有接尾辞」の構造が一般的で，中間地帯の言語の中には，格語尾によってとる構造が異なる場合もみられる(表 11)．一般的な傾向として，東の言語ほど複雑に分化した所有接尾辞の体系を発達させており，西の言語の中には，エストニア語(標準語)のように，所有接尾辞を失ってしまったものもある．

サモエード諸語，ウゴル諸語，およびモルドビン諸語では，他動詞が，主語の人称，数のほかに，直接目的語の人称，数にも呼応して活用することがある（表 12)．このような活用は，主語の人称，数のみに呼応する通常の活用（主語活用 subjective conjugation）に対し，目的語活用（objective conjugation）とよばれる．目的語活用が用いられるのは，直接目的語が限定されている (definite) 場合で，非限定 (indefinite) の目的語の場合は，自動詞の場合と同様に，主語活用が用いられる．目的語活用は，ウラル祖語において存在したものと考えられている．

動詞の否定は，多くのウラル諸語で「否定動詞＋本動詞」の構造で表わされ，人称語尾をはじめ，時制，法などの標識は否定動詞（ウラル祖語 *e-）とともに現われるのが一般的である(表 13).

ウラル諸語では，一般に，受動（表 14）が統語的なカテゴリーとして十分に発達しているとはいえない．

受動文が，統語的，形態的に独立した構文として確立しているとみなせる言語は，バルト・フィン諸語，サーミ語，オビ・ウゴル諸語に限られるようである．中でも，バルト・フィン諸語で受動文とよばれている構文は，行為者が明示されず，能動文の目的語にあたる名詞句が目的語の格表示をうけるという特殊な構文で，不定人称文(impersonal) ともよばれる．ボルガ諸語，ペルム諸語には，再帰，中動なども含む，広義の受動

〈表 11〉 所有接尾辞

「所有接尾辞＋格語尾」型の言語の例

マンシ語：	хāп	「ボート」	хāп-ум	「私のボート」	хāп-*ум*-н	「私のボートへ」
					хāп-*ум*-т	「私のボートの中で」
ハンガリー語：	hajó	「船」	hajó-m	「私の船」	hajó-*m*-ba	「私の船の中へ」
					hajó-*m*-ban	「私の船の中で」

「格語尾＋所有接尾辞」型の言語の例

エルジャ語：	кудо	「家」	кудо-со	「家の中で」	кудо-со-*н*	「私の家の中で」
			кудо-сто	「家の中から」	кудо-сто-*н*	「私の家の中から」
フィンランド語：	talo	「家」	talo-ssa	「家の中で」	talo-ssa-*ni*	「私の家の中で」
			talo-sta	「家の中から」	talo-sta-*ni*	「私の家の中から」

両方の構造がみられる言語の例

マリ語：	пӧрт	「家」	пӧрт-ем	「私の家」	пӧрт-*ем*-лан	「私の家に対して」
			пӧрт-ыштӧ	「家の中で」	пӧрт-ышт-*ем*	「私の家の中で」
ウドムルト語：	бусы	「畑」	бусы-мы	「私たちの畑」	бусы-*мы*-лэн	「私たちの畑の」
			бусы-етӥ	「畑を通って」	бусы-етӥ-*мы*	「私たちの畑を通って」

〈表 12〉 目的語活用

エルジャ語

кунда-н
「私は(不特定のものを)つかまえる」……主語活用

кунда-тан
「私は(あなたを)つかまえる」
кунда-тадызь
「私は(あなたたちを)つかまえる」
кунда-са
「私は(彼を，それを)つかまえる」
кунда-сынь
「私は(彼らを，それらを)つかまえる」
} 目的語活用

マンシ語

тот-ӭг-ум
「私は(不特定のものを)運ぶ」……主語活用

тот-ӣл-ум
「私は(特定の単数のものを)運ぶ」
тот-ыяг-ум
「私は(特定の双数のものを)運ぶ」
тот-ыян-ум
「私は(特定の複数のものを)運ぶ」
} 目的語活用

〈表 14〉 受動文

フィンランド語

He puhu-vat suome-a Suome-ssa.
彼ら 話す フィンランド語を フィンランドで
「彼らはフィンランドでフィンランド語を話す」

Suome-a puhu-taan Suome-ssa.
フィンランド語を 話される フィンランドで
「フィンランド語はフィンランドで話される」

マンシ語

Хум хап вар-и.
男 ボート 作る
「男がボートを作る」

Хум-н хап вар-аве.
男に ボート 作られる
「男によってボートが作られる」

エルジャ語

Эйкакшо-сь ловн-ы книга.
(その)子供 読む 本
「子供が本を読む」

Книга ловно-в-сь эйкакш-онтень.
本 読まれる 子供に
「本が子供によって読まれる」

〈表 13〉 マリ語の動詞 **луда-**「読む」の否定形

		直説法 現在		直説法 過去 I		願望法		命令法	
単数	1	ом	луд	шым	луд	ынем	луд	—	луд
	2	от		шыч		ынет		ит	
	3	ок		ыш		ынеж		ынже	
複数	1	она		ышна		ынена		—	
	2	ода		ышда		ынеда		ида	
	3	огыт		ышт		ынешт		ынышт	

相を表わす派生動詞をつくる接尾辞があり（エルジャ語：ловно-「読む」—ловново-「読まれる」；マリ語：воза-「書く」—возалта-「書かれる」；ウドムルト語：гыры-「耕す」—гыриськы-「耕される」），これらの動詞を用いて受動文に相当する文をつくることができる．

[辞　書]

Rédei, Károly(1986), *Uralisches etymologisches Wörterbuch* (Otto Harrassowitz, Wiesbaden) ——刊行中（全3巻）

[参考文献]

Austerlitz, R. (1968), "L'Ouralien", *Le Langage* (Encyclopédie de la Pléiade, Gallimard, Paris) (邦訳：「ウラル語族」『近代言語学大系2（世界の言語）』，紀伊国屋書店，1972)

Collinder, Bj. (1955, 1977²), *Fenno-Ugric Vocabulary* (Buske, Hamburg)

——— (1957), *Survey of the Uralic Languages* (Almqvist & Wiksell, Stockholm)

——— (1960), *Comparative Grammar of the Uralic Languages* (Almqvist & Wiksell, Stockholm)

——— (1965), *An Introduction to the Uralic Languages* (University of California Press, Berkeley and Los Angels)

Décsy, Gy. (1965), *Einführung in die finnisch-ugrische Sprachwissenschaft* (Otto Harrassowitz, Wiesbaden)

Hajdú, P. (1975), *Fenno-Ugrian Languages and Peoples* (Andre Deutsch, London)

——— (1976), *Ancient Cultures of the Uralian Peoples* (Corvina, Budapest)

Janhunen, J. (1982), "On the Structure of Proto-Uralic", *Finnisch-ugrische Forschungen* 44

Mark, Karin (1970), *Zur Herkunft der finnisch-ugrischen Völker vom Standpunkt der Anthropologie* (Eesti Raamat, Tallinn)

Основы финно-угорского языкознания. Вопросы происхождения и развития финно-угорских языков, 1974；*Прибалтийско-финские, саамские и мордовские языки*, 1975；*Марийский, пермские и угорские языки*, 1976 (Наука, Москва)

Vuorela, T. (1964), *The Finno-Ugric Peoples* (Indiana University, Bloomington)

Языки народов СССР III. *Финно-угорские и самодийские языки* (Наука, Москва, 1966)

[参　照]　フィン・ウゴル語派，バルト・フィン諸語，サモイェード諸語

（松村　一登）